

# [生きる力] と造形活動

—田んぼと築窯の体験学習を通して—

色部 和子

“Zest for Living (IKIRUCHIKARA)” and Art activities in the elementary school  
—Through the experiential learning that focused on a paddy field  
and building up pottery kiln—

Kazuko IROBE

キーワード：生きる力 造形活動 特色ある教育 築窯 田んぼ

## 1. はじめに

本稿の目的は、造形活動を通して[生きる力]を育むことの考察にある。では、[生きる力]とはどのような「力」なのか。まずは、[生きる力]について考えてみたい。

[生きる力]の登場は、1996年、中央教育審議会の「これからの学校教育の在り方」においての答申にある。答申は、[生きる力]とは変化の激しいこれからの社会を生きるために必要な力であるとして、以下の3点を示した。

- ①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
- ②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
- ③たくましく生きるための健康や体力

1998年告示の学習指導要領で[生きる力]の育成を目的として「総合的な学習の時間」が創設され、各学校が創意工夫を生かした特

色ある教育、特色ある学校づくりを進めることが求められた。

筆者は、当時、千葉市内の小学校で教務を担当し教育課程の編成に携わった。

すでに学童農園事業<sup>4)</sup>として休耕地を「活用した田んぼで「米作り」活動に取り組んでいた。また、タイミングよく造形教育で千葉大学と共同研究の機会を得た。加えて、この時期千葉市では、ダイオキシン絡みで焼却炉撤去計画<sup>5)</sup>が策定された。このような教育環境の中で、焼却炉を陶芸窯として利活用することに「特色ある学校づくり」の可能性を見出した。しかしながら、焼却炉の陶芸窯への転用は認められず、代替えとして実現したのが「築窯」である。

「米づくり活動」を見直して目的を明確にした「田んぼの学習」と築窯を活用した「粘土学習」を特色ある教育活動として教育課程に位置づけ、特色ある学校づくりの推進を図ることとした。両者に共通することは、体験を通して心と体で感じ、想像的・創造的に学ぶことができる活動であり、五感が刺激される

ということである。想像・創造・五感といった言葉は、「造形活動」のキーワードである。また、「土」も「造形活動」において重要な素材であることを経験上実感している。

筆者は、30数年にわたり造形教育に携わってきた。生き生きと「粘土」と向き合う多くの子ども達を見てきた。造形素材としての「粘土」も田んぼの「土」も自然の中で長い時間をかけて生成されたものであるから、触れると心地よいのである。「粘土遊びの心理学」の著者である中川織江<sup>6)</sup>は、須賀哲夫<sup>7)</sup>との対談の中で「自然の土には力があります。触れていると励まされ、力が湧いてきます。」と言っている。筆者も全く同感するところである。

次項では、「田んぼの学習」と「粘土の学習(築窯)」の中で展開される活動を通して、子どもたちに「生きる力」をどのように育んでいくのか実践を振り返りながら検証する。

## 2. 特色ある教育活動の実践

### (1) 田んぼの活動 (2001年～)

「生きる力」を育むために体験活動の重要性を認識し、学童農園での米作り活動に全校で取り組んできた。

「田んぼの学習」は、どろんこ遊びから始まる。活動は全校で取り組むが、企画運営の中心は5年生である。以下、活動の内容や様子について季節を追って考察する。

#### 春の田んぼ

##### ①どろんこ遊び (4月中・下旬)

田植えの前に代掻き<sup>しろか</sup>を行う。田の水が温む頃



に代掻きを兼ねて「どろんこ遊び」をする。写真は、どろんこ綱引きの様子である。ほかに鬼ごっこなど、子どもたちの意見を取り入れて行う。千葉大学の学生も参加し童心に帰って遊ぶ姿が見られ、ほのほのとした光景である。

「代掻き」の重要性について“稲がよく育つように土の中に空気をいっぱい送るんだよ。みんなが元気に遊んで、土をよく混ぜてくれると田んぼが喜ぶよ。”と伝える。

最初は恐る恐る入っていた子も、気が付けば手も足も顔も体中泥だらけである。夢中になり、心が開放される。転んでも、泣く子はいない。春の里山の風景、水の温み、風のおい、水生植物や昆虫などの小さな生き物たち…。たくさんの感動を五感で感じることができる。

このような「夢中体験」は、図画工作科が大切にするものである。場所やそこにあるものから思いついたことを自由な発想で活動し、一つのことに夢中になる。これこそが、図画工作科の「造形あそび」で狙うところの本質である。どろんこ遊びの活動は、「生きる力」で大切にしたい「感動する心」を醸成し、「豊かな人間性」をはぐくむ活動である。

## ②田植え（5月初旬）

田植えは、1・6年、2・5年、3・4年のペア学年で行う。1年生は、初めての田植えである。6年生が後方で苗を渡し植え方を教える。

このような縦割りの異学年活動<sup>7)</sup>は、全校遠足をはじめ様々な機会で開催し、答申が述べている生きる力の構成要素である「他人を思いやる心」を育む。



5年生は、事前に、1～4年生のクラスに出向いて田植えの仕方を説明する。児童は、わかりやすく伝えるために資料を工夫したり、説明のためのリハーサルを行ったりする。そこには、児童が友達と協力して、自ら考え、自ら課題を解決しようとする姿がある。子どもたちの姿から、「総合的な学習の時間」に求められる教科で習得した知識や技能を横断的に活用する「力」が働いていることが伺える。

## 夏の田んぼ

### ③田の草取り（6月下旬～7月初旬）

田の草取りは5年生の活動である。田んぼに入って、稲の間に生えてきた雑草を引き抜く。カエルやバッタも捕まえる。田んぼは、小さな命をはぐくむ。命の共生を学ぶ。

夏の田んぼは、青々として美しい。



## 秋の田んぼ

### ④稲刈り（9月）

秋。黄金色に実った稲。いよいよ稲刈りである。天高く澄み切った青空の下、“ザクッ、ザクッ”と稲を刈る音と子どもたちの歓声が響き渡る。

鎌の使い方も上手である。どう使えばケガをしないか考える。



落穂も拾う。一粒一粒大切にする。1本の稲穂に何粒の粳が実るのか。子どもたちは、田植えから稲刈りまでの一連の米作り活動を通して、粳一粒からたくさんの命が生まれることを理解する。「すみません」という言葉についても、「今、私の心が澄んでいなくて申し訳ありません。」という意味であることを知る。

夏の田の青々とした瑞々しさ、秋の田の黄金色、畦に咲く真っ赤な彼岸花など、日本の国の美しく豊かな四季が、原風景として心に刻まれ

る。日本人としてのアイデンティティが豊かな風土によって育まれることが理解できる。

子どもたちが手刈りした稲穂の束を地域の方がコンバインで脱穀して下さる。その後、乾燥・粳摺りをして「玄米」となって学校に届く。農家の人の協力のありがたさや苦勞を感じる。



### ⑤収穫

#### ○バザー

玄米が届くと5年生が精米して袋詰めをする。「さつきっ子米」と命名してバザーで販



売する。好評で、あっという間に完売。地域の



人が学校を応援して下さる気持ちを感じられる。売り

上げは、田んぼの肥料代など、大切な資金となる。

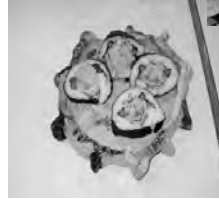
#### ○収穫祭

全校で『おにぎり遠足』を実施。給食室の皆さんに握っていただいた塩結びを感謝しながら味わう。田植え・稲刈りを一緒に活動してきた縦割りのなかよし班での楽しい1日である。

学年ごとに“収穫祭”を行う。それぞれ児

童が話し合って決める。

5年生は、千葉県の郷土食「房総太巻き寿司」<sup>8)</sup>を地域の方に教えてもらいながら作る。



左の写真は、「薔薇」の太巻き寿司。きれいな模様にするのは難しい。

他の学年も、それぞれに工夫して収穫祭を実施する。低学年は生活科で親子活動として取り組む。保護者にも新米のおいしさを味わっていただくとともに、学校への理解・支援の機会ともなる。

〈4年生の事例：わたしの“びっくり箱”寿司〉

#### 材料

- ・梅干し
- ・ひきわり納豆
- ・にんじん
- ・梅ジャム
- ・レタス
- ・いちご
- ・のり



#### 〈感想〉

- ・納豆が飛び出さないようにやさしく押しながらつくりました。
- ・飾りはお母さんと話し合ってたのでかわいくできました。
- ・出来上がったとき、納豆が飛び出してぼろぼろの押し寿司になるかと思ったが、美味しいのができてよかった。
- ・食べるときどこから食べたらいいのか迷ってしまった。お母さんにも食べさせてあげたいです。
- ・今度、家族にも作ってあげたいです。

冬の田んぼ

⑥ひこばえ

冬の田んぼに、小さな「穂」が育っている。「ひこばえ」という。「これは、食べられないのかな？」子どもたちは、興味津々。



冬の田んぼにも、命が育っていることを知り、いろいろな発見がある。



農園の管理や脱穀、籾すり等で地域の農家の人や保護者による援農ボランティアなどの支援がある。地域ぐるみで子どもを育てるための「地域の教育力」が一層育ちつつある。

「田んぼの活動」を整理すると、次のようになる。

**「田んぼの活動」**

日本の四季 → 豊かな感性・原風景  
 水辺の生きもの → 命の共生  
 異学年での活動 → 豊かな人間関係  
 米づくりの苦勞 → 協力・地域の教育力  
 収穫の喜び → 食文化  
 田んぼの体験 → 詩・作文・絵画  
 などの題材

国語・算数・理科・社会・生活・家庭・図工などの教科や道徳の学習との関連、つまり教科の枠を超えて横断的な学びを読み解くことができる。

(2) 築窯の活動 (2002年～)

田んぼでのどろんこ遊びを通して土に親しみ、図工の粘土学習にも生き生きと取り組む子どもたちの姿が見られる。『築窯』による陶芸学習が実現し、自分たちで育てた米を自分で作った器で味わう学習へと発展していく。田んぼと築窯の実践を全校児童・保護者・地域へと広げた試みである。

①築窯の手順

1. 煉瓦積み

地面を平らにして耐火煉瓦を敷き詰め、その上に耐熱煉瓦を積み上げる。築



窯は、千葉大学の学生が中心に行う。

2. 窯詰め

1か月ほど乾燥させた作品を、割れないように注意しながら隙間なく「築窯」に詰めていく。

3. 泥塗り



隙間に泥を塗り、熱が逃げないようにする。

4. 窯焚き



燃料はプロパンガス。焼く時間は季節によって異なるがおよそ6～7時間くらい。焼成している学年の子どもが、1時間おきに温度を計測しグラフに記入する。

5. 窯出し



窯出しは、翌日。「割れてないかなー!」「いい色に焼けたかな?」とドキドキしながら窯出しを待つ子供たち。煉瓦を外しながら取り出した作品を手にした瞬間「あつたか〜い!!」と顔がほころぶ。

②作品制作 (図画工作)



土粘土の感触を楽しみながら、思いを形に表現する。



各学年の題材は、以下のとおりである。

学年	題材
1年	土鈴
2年	さつきっこ動物ランド
3年	アッハッハッハああおもしろい
4年	顔
5年	MY OSARA
6年	状差し

③各学年の実践

1年生 「土鈴<sup>どい</sup>」



作品は2つつくり1つはお世話になった6年生にプレゼント。2つの音を聴き比べて「こっちを上げるんだ」と言った子に理由を聞くと、「こっちの方がいい音がするから」と。感謝の気持ちを感じる。

2年生 「さつきが丘動物ランド」

図画工作「立体に表す」の学習である。2Kgの粘土を体いっぱい使って、自分と



動物が一体となってダイナミックに表現する子どもの姿がある。

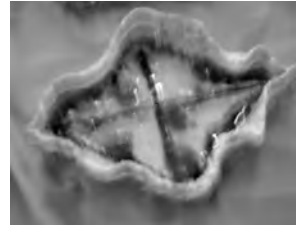
3年生 「ワッハッハッハッ、あ〜おもしろい」



おもしろい漫画本などを読んでいる自分を想像し「思わず大きな声で笑ってしまう」時ってどんな気持ちなのか、その時どんな格好をしているのか、などを動作化しながらイメージして表現する。



〈葉っぱのお皿〉⇨  
「葉っぱの色を工夫しました。」



収穫したお米で作った「房総太巻き寿司」を自分で作った「お皿」に盛り付ける。特色ある教育活動として、創意工夫が見られる展開である。「房総太巻き寿司」は、千葉県の郷土食である。

子ども達は、地域の人の「昔はどこの家でもお祝いごとがあると、このお寿司を作ったよ。」「昔からの伝統的な模様もあるけれど、新しく考えるのも楽しいよ。」などという話を興味をもって聞いている。

4年生 「顔」

自分の顔とにらめっこ「なかなか味がある」「よく見ると、顔っておもしろいな。」



6年生 「状差し」

「卒業してもつながっていたい…」という思いを込めて作る。

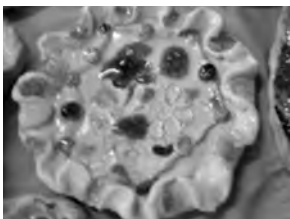


④作品の発表の場「『土の詩』展」

作品の発表の場として昇降口の一角にギャラリーを設置。展覧会『土の詩』を開催し、全校児童、職員、保護者の作品を一堂に展示した。写真奥のボックスは元靴箱であったが、ペンキを塗り展示スペースに改修した。このような改修作業や展示会場設営などの準備、地域へのお知らせなどを実行委員会体制で行った。

「つくる・みる」(表現・鑑賞)の造形活動の楽しさが感じられる。

5年生 「MY OSARA」



⇨ 〈花のお皿〉  
「自分で焼いたお皿に盛るのが楽しみです。」



「さつきっ子ギャラリー」

### 3. 考察—「生きる力」と造形活動—

特色ある教育活動の実践でみてきたように「田んぼの学習」や「粘土の学習（築窯）」に取り組む子どもたちは、生き生きと活動し、様々なことを学んでいる。子どもたちは、主体的に活動に取り組み、問題があれば教科の学習で習得した知識や技能を活用して、自ら解決しようとしている。そこに「生きる力」を見て取ることができる。このような「力」は活動全体を通して培うものであるが、「造形活動」という視点で捉えなおしてみると、以下の5点が特筆できる。

#### ①どろんこ遊び

体中どろんこで夢中になって遊ぶことで心が解放され、生きていくエネルギーが生まれる。

#### ②太巻き寿司の調理

金太郎あめの仕組みを理解し、模様のデザインを考えたり、美しさを感じたりなど美しい心を育む

#### ③粘土の作品制作

粘土の感触を楽しみながら、体全体で粘土に挑戦し、夢や希望など思いを形に

することの楽しさを味わう。

#### ④築窯で焼成

窯の中の炎の祭典、作品が真っ赤になること、土のままでは壊れてしまうものが高温で焼くと別のものに生まれ変わること、などを自分の目で直に確かめ、土のぬくもりを感じる

#### ⑤作品展

全校児童の作品を一堂に展示し、鑑賞活動を通して自分や友達の良さに気づき、認め合う心や感動する心を育む。

筆者は、図画工作・造形教育の研究を重ねてきた。指導要領改訂の時期に「粘土学習」で千葉大学との共同研究の機会を得た。研究内容は、『築窯』という簡易焼成窯を活用して、粘土学習に取り組み、図画工作科の目標の実現を目指すものである。目標は「表現や鑑賞の活動を通して、感性を働かせながらつくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とある。

「築窯」の活動は、土の塊が800度の炎に包まれて別のものへと変容する過程を直接体験できる。粘土にダイナミックに取り組み、思いを形にしていく造形活動を通して、つくる楽しさを味わったり、土の温もりを肌で感じたりできる。そのため、作品への愛着は強い。窯出しの時「あったか〜い」と思わずつぶやく子どもの声やお世話になった6年生へのプレゼントに2つのうち、「いい音が出る方をあげる」という1年生のやさしさ、地域の人から教えていただいた地域の伝統的な郷土食、



そしてその美しさ、自分で作った器に盛る満足感、自分の良さや友だちの良さに気づきより良い関係を築くこと、などなど感動がいっぱいある。

特色ある学校づくりの推進は、地域の自然や人の力を生かした特色ある教育活動を展開することで、変化の激しい社会に生きる子どもたちに [生きる力] を育むことをみてきた。

「造形活動」にみられる夢中になって遊び感覚で活動する楽しさや思いを形に表す時の喜びなどは、心に感動が湧き、子どもたちに主体性を育む。ここに、造形活動が [生きる力] を育むという本主題を、田んぼと築窯の活動を通して検証できた。

#### 4. 終わりに

学習指導要領は、時代の変化や子どもたちの状況等を踏まえて、おおよそ 10 年ごとに改訂がなされてきた。間もなくその 10 年の節目を迎える。

調べてみたところ、中教審は、平成 26 年 11 月に文部科学大臣からの諮問を受けて議論を重ね、平成 28 年 12 月 21 日「学習指導要領等の改善及び必要な方策」について答申している。

これまで継承されてきた [生きる力] の理念はどのように扱われるのか気になるところである。答申は、学校教育の将来像を描くにあって、2030 年頃の社会の在り方を見据えながら、その先も見通した姿を考えていくことが重要であるという。2030 年頃の社会は、社会の変化は加速度的となり複雑で予測困難な時代を迎えるであろうとのことから、このような時代を生きる子どもたちに必要な力は、

全く新しい力ということではなく、これまで学校教育が長年目標としてきた [生きる力] であると述べている。そして、「これからの学校教育においては、[生きる力] の現代的な意義を踏まえてより具体化し、教育課程を通じて確実に育むこと」を求めている。各学校の教育課程や授業等とのつながりがわかりやすくなるよう、学習指導要領等の示し方を工夫することを求めている。

間もなく新学習指導要領の告示が行われるであろう。これからの日本の教育、子どもたちの成長を見守っていきたい。

注

##### 1) 特色ある教育活動

「各学校が創意工夫を生かして特色ある学校づくりを進める」1998 年度改訂指導要領に示された「改善の基本的視点」の一つ。

##### 2) 築窯

耐火煉瓦を積み上げて造る簡易焼成窯。千葉市立さつきが丘西小学校において千葉大学（教育学部美術学科彫刻科）と共同研究。

参考文献：千葉大学教育学部研究紀要大 53 巻 大学と地域小学校の連携Ⅱ - 千葉市立さつきが丘西小学校との共同研究 - (上野弘道・神谷陸代 著) 大学美術教育学会誌 37 号 造形教育における築窯の位置づけについての考察 - 実践を基にした築窯の教材化 - 小橋暁子 著)

##### 3) 千葉市立さつきが丘西小学校 (筆者勤務校)

2001 4 ~ 2004 3 と 2008 4 ~ 2012 3 勤務。

##### 4) 学童農園事業

次世代を担う子供たちに、農業体験を通じて自然を慈しみ「食べ物や生命の大切さ」を知り、農業への理解を深めることを目標とする JA の取り組み。

##### 5) 焼却炉撤去

ダイオキシンが社会問題となり各学校に設置の焼却炉を撤去されることになった。

##### 6) 中川織江

「粘土遊びの心理学」の著者

##### 7) 須賀哲夫

日本女子大学人間社会学部教授

##### 8) 「房総太巻き寿司」

九十九里平野南部を中心とし、冠婚葬祭や集まりの時のご馳走として千葉県全域でつくられる郷土料理。